



【とみた・やそろくさん】福智町内の山笠づくりの大半を担う「人形富田」を営む人形師。県指定無形民俗文化財の黒崎祇園山笠も手がけている。弁城新町在住、93歳。



↑父譲りの職人かたぎで、決して妥協を許さない息子の泰昌さん。人形作りは集力力の持続が必要になるため「いまだに人形が夢に出てくることもある」という。

●人形師 富田八十六

その情熱で魂宿す武者人形 多才な名人による多彩な山



↑膨大な数におよぶ合戦と武将の書。配置図は小さく、すべて頭にたたき込まれている。八十六さんの師・花田一夫さんは直方駅前にあった廣弘夫像や上野小・弁城小の二宮金次郎像を手がけた彫刻家。

京

都祇園山笠の流れをくむ屋形山、なかでも福智の山笠は人形飾りが特徴だ。この山笠は北九州市の一部・周辺と筑豊地区に残る独自のスタイルだと言われている。ちなみに博多の追山に代表されているが岩山で、屋根や開きがあるのが屋形山。身近で親しみある地元山笠だが、実は貴重な民俗文化なのである。そして、その作り手もまた貴重な存在。地元はもとより、県指定無形民俗文化財の黒崎祇園山笠も手がける人形師・富田八十六さん（弁城）がその代表的存在だ。名付け親は当時の庄屋さんで「長生きするように」という願いが込められている。今や八十六さんは93歳。名前の年齢を越えてなお現役「人形富田」の大頭領だ。

富田八十六さんは大正4年生まれ。小さな時から絵を描くのが好きで、小学生のころから絵画コンクールで受賞を重ねた。町内に人形師がいなかったことから、手先の器用さを生かし、15歳ごろから人形作りに関わる。豊前市八屋の人形師に弟子入りし、その後、師匠の花田一夫さんから技術を徹底的に仕込まれた。しかし、やがて修行を終えたところ、太平洋戦争で南方戦線へ向かうことになり、人形作りはいったん中止せざるを得なかったが、復員後、気持ち新たに人形作りに打ち込んだ。やがて6人の子玉に生まれ、息子の典生さんと泰昌さんが弟子入り。偉大な父であり、厳しい師として接した。



↑その手ははきはは衰え知らず、器用な指先はまだ健在だ。ハワイやオーストラリアなど海外に派遣した八十六さんの黒崎祇園山笠は、現地の日系人が懐かしさと感動で深したという。↑山飾りの絵も手がける八十六さん。油絵、水彩画、水墨など何でもこなす。若いころ、こっそり家の米俵を売って、当時貴重な絵の具を買っていたという情熱家。



修行は、自らがそうであったように、はじめのうちは掃除だけ。口では一切教えない。「目で盗め」というスタイルを貫いた。昔かたぎの竹を割ったような性格で、根は優しい八十六さんである。

山笠作りは和の総合芸術

「何でもこなせんと一人前やない」と八十六さんが言うように、山笠は細部にわたり、見れば見るほど、和を凝縮した「総合芸術」である。彫刻、絵画、書さらには建築の要素も加わる。合戦の知



↑全景を見ながら弟子に指示を出す八十六さん。安全祈願の「盛り壇」も傍に。



↑師の指示を受け人形を飾る。周囲には緊張感が漂う。武者人形は、体長およそ15cmの重さがある。



↑工房では伝統技が次代の人たちへと引き継がれていた。左は息子の典生さん。

↑地元関係者が見守る中に行われる「山籠り」最後に八十六さんが筆を入れた合戦の名を山笠の表裏に掲げる。